

4460

佐世保鎮守府造船部船渠
築造、件

決裁済

大臣

次官



廿六年一月十九日

主務

主事



校令



淨寫



發付



一月廿日

立案者

第二局長



第二課長



第三局長



第一課

第二課



回答案

佐第六三号ヲ以テ内議相成レ造船部建築ニ事
施行方ハ我ハの案意ニ趣キテ併シ船渠築造
方ニ付テハ之ヲ下問ト見做シ更ニ詳細計画ヲ提出シ該下
問ニ答フ云々ト有シ詳細計画ヲ提出相成レ可然

官房第一八四号

毎

頁

海軍 官

義之ヲ得兵更ニ教定ヲ仰クノ必要ニ至シ官房第九也一
訓令ノ決定ニシテ計畫ニシテ之ヲ下同ト見做スヲ要セズ其
事ニ貴府ノ責任ヲ以テテ施行相成ル我府該訓令ノ計
画及方法ヲ變更セズ又豫算ニ差御者多ク之限リノ損
及ニ由リテ裁定ヲ經ルヲ要セサル我々右ノ事知悉
付能及ル事也

明治廿九年一月二十日 海軍次官

信世保坂守府司令長官宛

佐第六三號

第二課廻



所據造部一切建修之計畫、如右當付
 檢出之上記符、中多々有之に般に取次生之候に
 可、遂に決り、中亦有之程、取次生之に
 法個査、未遂回國、御付合方、一五七一錦州
 建修之當文、分方、一五七一錦州、以、之隨、
 此、分、之計畫、書、字、檢出、之、分、
 一、潤、御、向、右、日、出、候、送、
 二、是、之、分、
 三、右、候、所、據、
 四、方、候、所、
 五、方、候、所、
 六、方、候、所、
 七、方、候、所、
 八、方、候、所、
 九、方、候、所、
 十、方、候、所、
 十一、方、候、所、
 十二、方、候、所、
 十三、方、候、所、
 十四、方、候、所、
 十五、方、候、所、
 十六、方、候、所、
 十七、方、候、所、
 十八、方、候、所、
 十九、方、候、所、
 二十、方、候、所、
 二十一、方、候、所、
 二十二、方、候、所、
 二十三、方、候、所、
 二十四、方、候、所、
 二十五、方、候、所、
 二十六、方、候、所、
 二十七、方、候、所、
 二十八、方、候、所、
 二十九、方、候、所、
 三十、方、候、所、
 三十一、方、候、所、
 三十二、方、候、所、
 三十三、方、候、所、
 三十四、方、候、所、
 三十五、方、候、所、
 三十六、方、候、所、
 三十七、方、候、所、
 三十八、方、候、所、
 三十九、方、候、所、
 四十、方、候、所、

是ノ趣ニテハ初出未定ニテ其ノ調査ニ付テハ其ノ當
 計ニ与ラサル際トモ亦其ノ中積未シキトモ一裁定
 ヲ下カサルヲ以テ其ノ結果モ生々ヘク書面上所カ妥當
 ヲ名キ能ク其ノ趣有ク其ノ旨書ニ以テ其ノ旨ニ
 ノ大体ヲ示サレタル以下見做シ生詳細ハ一取
 子子ノ計畫トモクハ其ノ旨書ヲ提出シテ候所
 下官ニ与ヘ而シテ初出未定ニテ其ノ旨書ヲ提出
 其ノ旨書ニ全ク其ノ旨書ニ全ク其ノ旨書ニ全ク其ノ旨書
 極力上玉候ノ事トモ亦其ノ旨書ニ全ク其ノ旨書ニ全ク其ノ旨書

明治二十六年一月十日

男爵井上馨子爵大村公長友

津島河守次友殿

當以テ奉文ニ係リ其ノ旨書而シテ整理上ニ与テ其旨亦

三 初 年 癸 丑 年 三 月 廿 日 廣 生 寺 校 務 會 附 允
事 有 之 於 此 如 申 海 務 也

海
軍

第二課廻

本月十七日所交第七号ヲ以テ付テ保銀
 守府造船部船集計畫ニ冥シ井上代世保
 船守府司令長官ヨリ伊予海軍次官ハ
 内議ヲ爲シテ係ハは尙旨之振リ議右ハ
 曾テ海軍大臣ヨリ出テ達ス本邦ノ航
 船集計畫及工事ノ施行方法ニ重要ノ
 事トシテ豫算等ニモ事々々々ノ限リハ
 工事ノ施行中諸事ノ事トシテ裁定ヲ仰
 カレサルモ宜シト考テ行ハ出テ至
 事ノ意見見テ并陳セテ

明治廿六年一月十日 石里 未堂 謹言

受第七の號ノ二

上 大 宣 又 可 見

第二課廻

局長



局長

印

依世保法方針送部如渠汁臣國と別券定一連日付
司令長官より協同あり右項未了事迄を載定経サレ
ト考又急了部を存少厚共入費豫算等ニ關係セテ
方ニ中支の意思見事初段至急何方ノ我刀回
答を早急に

發付済

大正十一年一月十七日

局長

石星土木監督署技師宛

受第七〇號

海軍

9860

電報



Handwritten characters: 上野 (Ueno), 東京 (Tokyo), 電報 (Telegraph)

Vertical handwritten text on the right side, possibly a recipient's name or address.

Vertical handwritten text in the center, likely the message content.

Large handwritten characters '十九' (19)

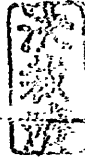
Vertical handwritten text on the right side, possibly a recipient's name or address.



4880

官報

6860



大臣

次官



廿六年五月 日

主務

主事



淨寫

校合



發付

五月廿日



立案者

第三局長



第三課長



第三局長



第三課長



訓令案

客年八月官房第一九七号ヲ以テ相達カ造船

部船渠築造ニ當テ内船渠口別紙圖面ノ

圖改正スル

明治廿六年五月十六日 海軍大臣

官房第一九七号

母

頁

佐世保鎮寺付司合意書文宛

汗

軍

理由

三本大分

船渠口別紙同面(用)廣ク入ルルキハ艦船ノ出入等ニ係
益リ増ルルナリナラズ佐世保鎮寺付建業主任者ノ協賛
ヲ蒙リテ築造上ニ差支多ク且入費極大ニ要
莫ク生セサルニ付本案提出也

同面ニ別紙同面ニ係同文

主事

廿六年五月 日

主務

立案者



淨寫

三浦

發付



校合

五月廿二日



大臣



次官



第三局長



第三局長



第三局長



指令案

第三局長



佐第三四七〇号ニ繼續費ニ係ル造船部建築
計画認許ス

明治廿六年五月廿二日

官房第三八号

五

五

後第二四七〇號

本府造船部經費

言連書類進達

本府造船部建築工事船泊築造方法決

定相成之矣。付全本。隨洋之。言連書等要

二右船泊、立置、後、提出可致旨。官房第

二七一二號。言連。其。言。及。豫算。内。詳

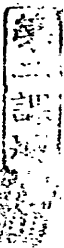
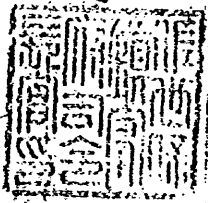
書。等。取。調。品。紙。進。達。候。也。

明治三十六年二月二日

左大臣鑒。官房第一九七一號。以

海軍大臣子爵仁禮。日京。乾。殿

追。船。原。築。造。費。官。房。第。一。九。七。一。號。以



于既：御決案相成居云云。仔細ハ各々
 度ニ於テ西女譜ス可キ義類ノ書ヲ載シ置
 云々間此餘申添ユク也

設計の順序

一 陸軍費中廿三年より廿六年度迄は豫算決定
 せしレテ工事未着なるハ半は恒地ノ変更ニ止
 構造採扱共前設計ニヨリ其供揚上ス但該設計
 ノ変更ハ別ニ上申ノ者

一 二十七年年度以降迄ハ新船標準恒地ニ此
 従来ノ設計ニ取捨増減ヲ加ヘ又必要欠ク可クサレ
 者ハ此際費用ヲ繰合セ其費用ノ増設ヲナシ専ラ工
 場ノ整備ヲ期セリ

一 工場其他ノ工事ニシテ他ノ附屬トナル可キモノハ此
 際該ノ事各種ノ下ニ組入レタリ

海軍

進達書目録

イ号 一造 船部 経續 費支出 年度 割表

屯葉

ロ号 一会 豫算 彙 決算 調書

屯葉

ハ号 一造 船部 工場 位置 圖

屯葉

ニ号 一造 船部 経續 費 以 二十五年 度 豫算 其他 書類

屯格

ホ号 一会 二十六年 度 会上

屯格

ヘ号 一会 二十七年 度 会上

屯格

ト号 一会 二十八年 度 会上

屯格

チ号 一会 二十九年 度 会上

屯格

リ号 一会 三十年 度 会上

屯格

又号 一造 船部 船具 機械 圖 之 書類 入

屯袋

ル号 一造 船部 工場 機械 配置 圖 入

屯袋

海軍

第 二 七 〇 四

第三課

三

受取二七〇、錦ヲ以テ当付生計部計画
書類中取調ニ付、御申越共起テ家
計ノ外、計中、朱書ノ邊、自ラ然、計ノ
事、外、計中

此ノ為ニ切配、並、田、管、事、等、銀、材、精、査、所
没、計、書、在、場、附、外、計、中

昭和二十六年二月五日

田邊 井上 啓 昭 然 付 司 長 友

福岡市三局長 友
奈良市三局長 友

受 第 二 七 八 號 一 二

海 軍

訂正

訂正

一 造船部継続費支出年度別表備考中「手」アリ埋築費單價より
 算出金額と違ハセリ理由了解し「手」單價と数量を乘し何
 たり増減スハ「吉」方計十三百三十九圓九角七占ニナリ也

数量と單價を乘し「手」ノ測量費以於「手」加入算出上ノ都合
 依り削減シタル金額於九月五占ニ「手」ト「吉」ト「手」ト「吉」ト
 數量に於キ七百九十九圓三占ノ「手」ト「手」ト「手」ト「手」ト訂正相
 成度

一 全表に記載したる称番号ヨリ見れば
 部工場位置圖に示され番号ト符合セズ何レカ一方の訂
 正ヲ要ス

此處に示したる半肉多ク訂正相成度

一 全表の端弁製造場の建具場模型場鋸鉋場の單棟化

行司満

記司満

記司満

園
八号
記司満

三ノ記載しアルも建具場ハ階上ニアリ端舟製造場ハ階下ニアリ
等々其旨明記スルノ要ス

棟代造ニ階上ニ有ルモノハ訂正相成度

一 石水涵吉ヶ所ハ凡ソ何噸計ノ水ヲ入得ル計画ナク

七百五拾噸ト記載相成度

一 工場汚灌用水涵ハ不必要ナルヤ若シ必要ナシハ其豫算ハ

何シト食有スルヤ

汚灌用水涵ハ必要ナシ其豫算ハ水涵費ナク食有ス

一 造船部工場ハ位置高而船塀外形基外及クレーン下等寸

總テ海岸固リノ水ノ深サヲ見ルハ朝工務規定亦三号ノ水中ニ掲ケルモノノ水面以

下幾尺ニスヤノ計画ナクヤ高面平ニ記載ヲ要ス

高面ニ記載ナク

一 鉄材積落場ハ固リ設ケルハ不便ト考ヘル固ナクニ為シ

子に如く

為持取換の相成

一 様械配置箇中船渠即筒塔ノ器面百多、下記載
アル氏端尺ノ相違アル様考、るり又元ノ計面ヲ変更
せし様考、るり其理由如く

百多ノ誤ラニテ百多者、一訂ニ相成度又即筒塔ノ元ノ即
筒内何ノ設置ハ計画ノ孔隙等、於今ニ即筒内何
ノ設置スルノ意ナシ

一 塗具塔内ノ水海ヲ設ケルハ危険ヲ防クノ切サトト考ル様外
設ケル丁ニナシテハ如く

塗具塔ノ外ニ置リ丁ニ訂ニ相成

一 鉄材庫屋根下ノ斜支柱ヲ置ル中ハ山形鉄等リ格
納スル際差支ナキヤ

訂正

斜支柱ヲ除リ訂正初版交

一 材料倉庫事務室及材料物為検査場本表並に記

載ルルモノニ依テ接続シタルモノヲ吉棟ト身ニ依テ身本表並に

三坪央ト訂正致シ又事務室ト物為検査場トノ間

互リ一長サハ五米突ニナルモノヲ三坪央トナシタル如ク

本表并屋敷ノ区ノ間ニ長サ五米突ノモノヲ訂正又廊下ノ五米突ノ

モノニ長サ五米突ノモノヲ注シテ訂正又廊下ノ五米突ノ

一 製罐工場33坪4分1スラップト高面中ノ記載ルモノヲ概算目録

中ノモノヲ如ク

33坪4分1スラップト概算目録中ニ依リ高面中ノ編入セリ

一 船塙橋柵工場岩神目録中ノ(四)ノ四ノ四ノ四ノ四ノ四ノ四ノ

誤リナラズヤ

直至八十四時誤リニテ即チ修正シテ四ノ四ノ四ノ四ノ四ノ四ノ

1001

訂正

訂正

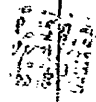
訂正

第三課廻

第一局長



課長



第二局長



第二課



佐第ニ四七〇号ノニヲ以テハ達現候ハ造船部計画
書類中別表記載ノ席ノ取調ニ急務回答
現候由

造船部ニ場信是回函一般ノ計画ヲ示ス重要ノモノ
ハ造船部長陸中ノ上ヨリ送付モ中別表同
面ヨリ却返也

發行

大正二年二月十五日

第三局長

第四局長

佐佐木 友成

受第二七八號

海軍

- 造船部繼續費支出年度割表備考中ニ示シル埋築費單價ヨリ算出金額ニ達セシ理由ヲ解シ難シ單價ニ數量ヲ乘シ何ク増減スレハ港方或ハ三指九指迄或ハ更トナルヤ
- 同表ニ記載シル公称番号 20 21 22 23 26 27 28 29 30 ハ造船部工場位置圖ニ示シル番号ト符合セズ何レカ一方ニ訂正ヲ要ス
- 同表ニ端舟製造場建具場模型場鋸鉋場ハ單ニ煉瓦ニ記載アルニ違異場ハ階上ニアリ端舟製造場ハ階下ニアル旨有明記スルヲ要ス
- 原水溜港ヶ所ハ何噸計ノ水ヲ容レ得ル計画ナルヤ
- 工場後鑛用水溜ハ不必要ナルヤ若シ必要ナレハ其線算ハ何レニ含有スルヤ
- 造船部工場位置圖面船渠外船台外及クレーン下等總テ

五
置

海軍

海岸通りノ水深サヲ最小満潮（工務規程第33号）ノ水面以下幾尺

ニナスノ計画ナルヤヲ回面中ニ記載シ要ス

一 鉄材積戻場ニ圍ヒテ設クルハ不便ト認ム別紙回面ノ如ク爲シ

テハ如何

一 機械配置圖中船渠脚筒場ノ回面百分ノ一ト記載アルトモ縮尺ニ

相違アル様考ヘル又本省ニ於テ計画（元ノ計画ニテハ本邦ノ如ク）ノ回面ヨリ其計画

變更シタル理由如何

一 望見場内ニ穴藏ヲ設クルハ危険ヲ防クノ功サナシト考フ場

外ニ設クルコトニナシテ如何

一 鉄材庫屋根下ニ斜支柱ヲ置クハ山形鉄等ヲ拵納スル際

差支ナキヤ

一 材料倉庫事務室及材料物品検査場（本家港）ト記載アルトモ

互リニ依テ接續シタルモノヲ棟棟ト見做スルハ（本家港ハ拾九坪）

（附屬家港ニ採五合）

ト訂正致シタシ又事務室ト物品検査場トノ間ノ直リノ長ハ五米突
ニナス(キヲ三拾呎ニテモ之ハ如何)

一 製鐵工場圖面中 33 34 35 スラッヅレ圖面中 記載アリモ機械

月録中ニナキ如何

一 船台器械工場器械月録中ニ(12)ハ十四呎ガアルト云ハ十四ハ
呎ノ誤リナラズヤ

海軍

物
108



身
一
調
有
皇

唐
佛
羅
身
尺
直
線
實
計
制
訂
表

支 出 年 度	制 訂 計	改 正 計	善 増 減
本 三 年 度	一 五 〇 〇 〇 〇 〇	一 五 〇 〇 〇 〇 〇	〇
本 四 年 度	一 四 〇 〇 〇 〇 〇	一 四 〇 〇 〇 〇 〇	〇
本 五 年 度	一 三 〇 〇 〇 〇 〇	一 三 〇 〇 〇 〇 〇	〇
本 六 年 度	一 二 〇 〇 〇 〇 〇	一 二 〇 〇 〇 〇 〇	〇
本 七 年 度	一 一 〇 〇 〇 〇 〇	一 一 〇 〇 〇 〇 〇	〇
本 八 年 度	一 〇 〇 〇 〇 〇 〇	一 〇 〇 〇 〇 〇 〇	〇

石									
連海									
易									
平									
易									
平									
平									
平									
平									
平									

巻四

1008

前設計ノ各ハ
 本館内ニ於テ
 帝國鐵道
 事務下ニ於テ
 成レリル明細ノ
 大畧ナリ

佐世保鎮守府建築費 (運輸部) 設計新旧對照表
 前設計費 改訂設計費 差増減 記 事

船渠造設	の 三六八三四七一 八八四三九七一	の 五三一五二七三四 一五三八九六五三四	の 三三三三三三三三 改訂設計	三三三三三三三三 改訂設計
敷地開墾	丙 四七三三三三三三 三七七九一三三四	丙 四七三三三三三三	丙 四七三三三三三三	丙 四七三三三三三三
堰堤築造	丙 一四七三三四二四 二九二八六六六六	丙 六二五〇〇〇〇〇	丙 八四八八四二四〇	丙 二一四年及より起工
浚渫	丙 一七九五九四九 一〇九八九九	丙 一〇七九八九六六	丙 七六六四八八四	丙 全上
暗礁取除費	丙 三六〇〇〇〇〇〇	丙 〇	丙 三六〇〇〇〇〇〇	丙 〇
船舶出入門築造	丙 一三四七三〇〇〇〇	丙 〇	丙 一三四七三〇〇〇〇	丙 〇
埋築費	丙 二七六六三三七 一三三三九九九六	丙 二二六一三七〇〇	丙 六二五〇〇〇〇	丙 二一四年及より起工
道路開闢	丙 一七五〇〇〇〇〇 二二四二五〇〇	丙 一〇〇〇〇〇〇〇	丙 七五〇〇〇〇〇	丙 二一五年及より起工
石垣築造	丙 〇	丙 五九六五七〇〇〇	丙 五九六五七〇〇〇	丙 二一六年及より起工
物揚場	丙 〇	丙 一五〇〇〇〇〇〇	丙 一五〇〇〇〇〇〇	丙 〇
船臺築造	丙 一九六〇〇〇〇〇	丙 三八〇〇〇〇〇〇	丙 一八四〇〇〇〇〇	丙 〇

島山

毎頁

船身模造場	船具製作場	瑞船製造場	製図工場	船舶取脱品置場	守門室	材料試験及金密室	造船材料倉庫	倉庫	造船部	水道	清渠	起重基礎	鉄道及回轉器
内 一六八 七三七 七〇〇〇	内 一六八 七三七 七〇〇〇	内 一〇八 一六〇 〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇	内 二六八 八八〇 〇〇〇〇 外 二〇〇 〇〇〇〇〇	内 二六八 八八〇 〇〇〇〇 外 二〇〇 〇〇〇〇〇	内 三七一 五一一 〇〇〇〇	〇	〇	〇	〇
一八八 二〇〇〇〇	一八八 二〇〇〇〇	一一二 七〇〇〇〇	三九〇 〇〇〇〇〇	四九〇 五〇〇〇〇	一八七 五〇〇〇	八四〇 〇〇〇〇〇	一〇〇 〇〇七 五〇〇〇	二六八 八八〇 〇〇〇〇	四三二 〇〇〇〇〇	九八〇 〇〇〇〇〇	二四〇 〇〇〇〇〇	六二二 八〇〇〇〇	二〇〇 三〇〇〇〇〇
中 〇〇〇〇	中 〇〇〇〇	〇	三九〇 〇〇〇〇〇	四九〇 五〇〇〇〇	一八七 五〇〇〇	八四〇 〇〇〇〇〇	八〇〇 〇七 五〇〇〇	〇	〇	九八〇 〇〇〇〇〇	二四〇 〇〇〇〇〇	六二二 八〇〇〇〇	二〇〇 三〇〇〇〇〇
同上	同上	二十三年度に於て竣工					本倉庫二十四年度に於て竣工	二十四年度に於て竣工	二十三年度に於て竣工				

計 算

鋸 鉋 場	一、二七〇〇〇〇〇 一、三二〇〇〇〇〇	一、二七〇〇〇〇〇	〇	全上
造船工場	二、八〇八、三三三、三三三	六、六、五、九、九、九	三、八、二、五、九、九	
船工点檢場及負傷者仮治療場	一、〇〇〇〇〇〇〇	二、六、一、五、〇	一、六、四、一、五、〇	
船渠工場	八、七、七、五、〇	一、一、二、六、二、五、〇	二、四、八、七、五、〇	
旋盤及組立工場	六、三、〇、〇、〇、〇	四、四、七、四、三、〇	一、八、二、五、七、〇	三十五年及より起テ、処三十六年及、保 越起エ、分
橋梁掘削場	二、二、五、〇、〇	二、二、五、〇、〇	〇	三十五年及より起テ、 越起エ、分
鑄造工場	一、六、八、〇、〇、〇	二、一、〇、八、二、五、〇	四、八、八、二、五、〇	三十五年及より起テ、 越起エ、分
鍛鉄工場	二、四、〇、〇、〇、〇	二、九、七、四、九、五、〇	五、七、四、九、五、〇	
製罐工場	五、七、〇、〇、〇、〇	四、九、三、八、二、〇	一、三、一、八、〇	
網具工場	一、〇、〇、八、〇、〇、〇	五、一、九、七、五、〇	四、八、八、二、五、〇	三十五年及より起テ、 越起エ、分
鳴鐘臺	〇	三、四、五、〇	三、四、五、〇	
柵及通用門	〇	一、三、〇、〇、〇	一、三、〇、〇、〇	
竿燈	〇	八、四、〇、〇	八、四、〇、〇	

主事



浄寫



發



廿六年五月日

主務

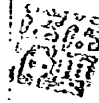


校合



五月廿日

立案者



大臣



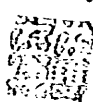
次官



軍務局長



第...課長



經理局長



第三課



指令案

佐第一卷三号 船渠位置移動件認許
明治廿六年五月廿七日

官房第(四二)号

海軍

佐第一卷一三號

船渠位四道移動之呈請ニ付稟申

所在官房第一九七一號所轄造船部船渠致去
 造、御前達ニ奉_レ本一月在幕六三號ヲ以テ
 司以議次官、内議、主官房以第一八四號ヲ以テ談
 訓令ハ決定トタル_レ計速ナルニヨリ審更シ得
 サレ旨同差_レ取_レ御前達、方法ニ其基キ既定、
 位四道、三月一日ヲ以テ先_レ潮留及掘鑿ノ事業
 三善子且ツ地底核定、爲_レ四十有餘尺、計井
 可成子_レ其處上層ハ敷實ニシテ下層ハ堅硬
 ノ山石盤_レニ有_レ其方向ヲ探ルニ既定、位四道ハ少
 ク此山石盤_レ外シ_レ其_レ付此際別紙圖面ノ通り



青井言受

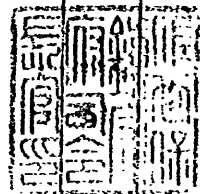
脚カ船渠ノ下潮留ノ位置ヲ移シテ此聖賢地盤
 ニ移シテ其得者即今善寺ノ工費ニハ多少ノ増
 減可相生シ其得共渠ノ底ノ側壁トノ過半ハ極
 メテ堅固ノ位置ニ占メ以第二善寺以階ノ工費
 ニ至リ大ニ工費ヲ減スル而已ナラス施行上萬全
 便利不敷ニ付船渠既成ノ位置ヲ移動
 工夫可然思考ニ付余ノ商面相談意見見上
 陳ニテ也

追テ本件ハ目下ノ工費ニ関係不敷ニ付至急
 御詮議相可様致度亦位置移動ノ
 里トシテ工費ニ使用ノ材料モ大ニ節減ヲ得
 可申見込ニ付時宜ニ係リ多少材料ノ費
 シ生ス可シ其強此能ニ申ニテ也

明治三十八年五月十八日

陸軍大臣伯耆西郷従道

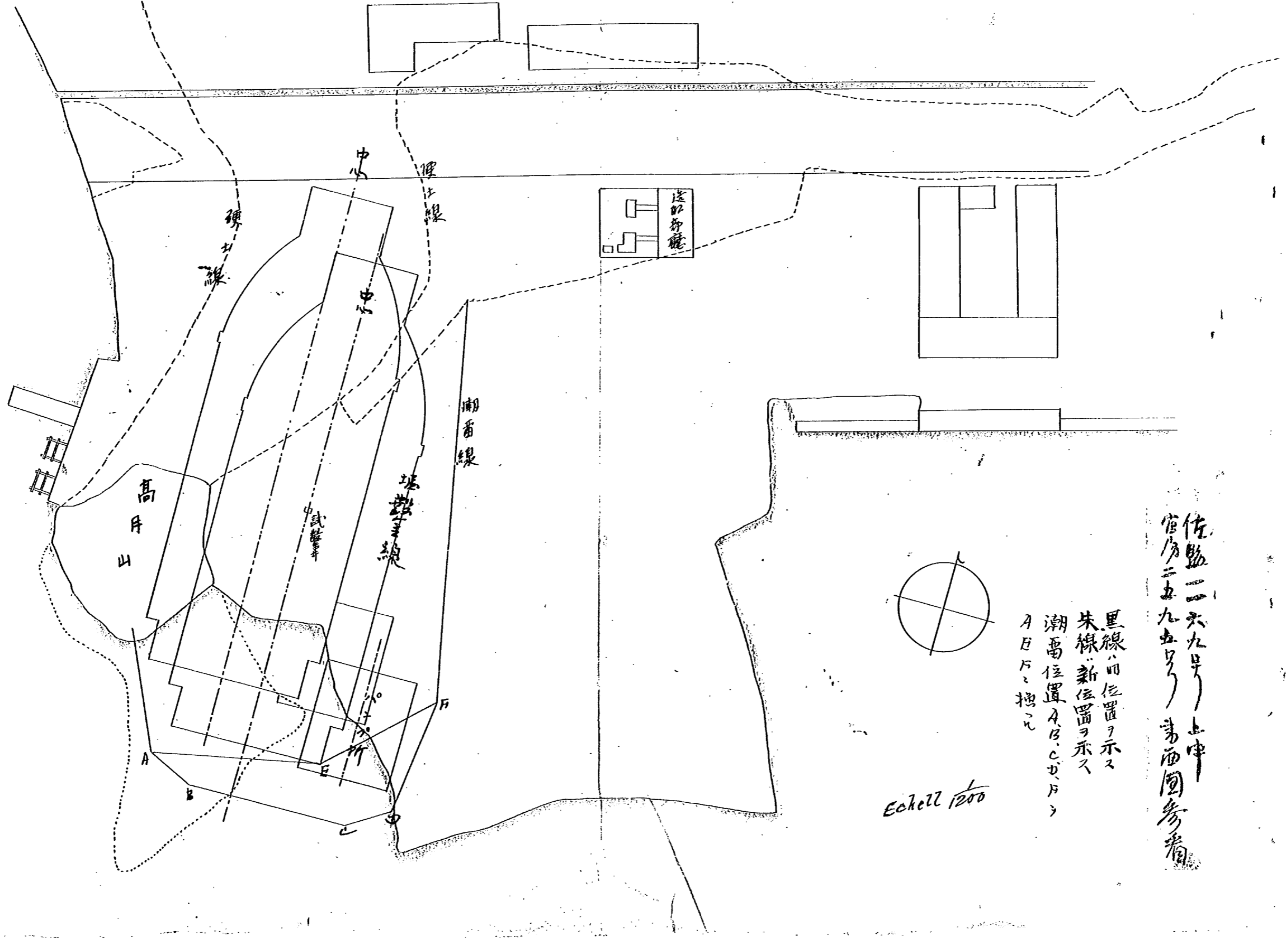
陸軍大臣伯耆西郷従道



海

軍

1016



佐藤二六九号ノ上中
官房二五九五号ノ東西圖參考

里線ハ旧位置ヲ示ス
朱線ハ新位置ヲ示ス
潮番位置A、B、C、D、E、F
A、E、F、ト揃ヒ

Echell 1200

軍務

軍務局長



第三課

海軍



災

本月廿三日所軍、才一七〇ヲ以テ佐世保館
 守府選船部一船渠位置福高ノ新舟代
 世保館守府司令長官ヨリシ上申書并ニ圖
 而古屋ノ本官意見ハシテ進言ナラセラル
 照令會シテ了後右ノニ事地踏査ノ上ナラ
 テハ技術上確実ナル意見申上兼テ了書
 別紙申上申書及ヒ圖面等ニ接シテ福助長方
 宜敷モノノ様ニお見えハ及ヒ及及及及及
 明治廿六年五月廿日

石黒土木建築部長 技師



海軍省

海軍省軍務局長殿

上 蓋 又 印 受 取

追るは医府に古頼國和幸ハ乃由及申
形也

二二六四七

軍務局長



第三課長



佐世保原守村造部部船渠位呈後動成別紙の由
同封多上申す一在ハ許可事申上事一ト在ハ
得共物申官而之見善知成至急何分一團
局方一也

近于別紙の四番一了一返部

大正五年四月廿三日 軍務局長

石里 味邊勢署 中務省 技師 充

軍務局長

海

軍

1020



局 着		局 發		
印 附 日	信 受 午 一 時 十一 分	付 受 午 十 時 四 七 分	第 一 五 號	廿 七 日 局 報
		廿 七 日 局 報		

經理局

信 受

カイグレンセウ
サイゴウ
カイグレンヌイモ

第三課

日本政府電報送達紙
著第 三

事記

九月廿九



人 信 發

カイホ
チゴウ
ダイウ
エライテウカ

カイホ
チゴウ
ダイウ
エライテウカ

和信電報局

東京四二一



1021

官報



第三課

大臣

供覽

次官



軍務局長

佐監一一八四号

佐世保鎮守府造船部船渠堀鑿地内出水件御届
本府造船部船渠堀鑿地盤より客月初旬海水噴出
セシ付其原因取詰之結果トシテ擔任技師恒川柳作ヨ
リ別紙之通り概況報告ヲ夫ニ付不取敢此段御届仕美
也

明治二十六年九月十六日

佐世保鎮守府監督部長岩村兼善

主事

海軍大臣伯爵西郷從道殿

經理局長

第三課長

海軍

第三課



第九番

為件ハ
為知
ナリ

諸
御
相
印
御
印
御
印

外船渠堀鑿地内出水件御届

地々盤ヨリ客月初旬海水噴出

トシテ擔任技師恒川柳作ヨ

口矣ニ付不取敢此段御届仕矣

六日

付並督部長岩村兼善



御従道殿

第三課長 相原

海軍

本件ハ本署管署石里技師、
為示知字及送付等事
九リホ下
御印付

1023

佐世保鎮守府造船部船渠堀敷金地内出水量報告

農林科主筆

本船渠堀敷金最大滿潮面以下四十四尺余ヲ堀敷金ニモニシテ其位置半海中ニアルヨリ湧水及海潮滲透主素ヨリ免カル可カラザルモノナレバ其水量ノ多ク本堀敷金及ビ船渠構造上大ニ關係ヲ有スルモノナルヲ以テ茲ニ出水ノ経過及ビ現在ノ概況ヲ掲ケ以テ報告セントス

本堀敷金去ル三月ヨリ着身ニ漸次地盤ノ水面以下ニ下ルニ從ヒ請負人潮爾工ノ全成ヲ待ツノ不得策ナルモノトシ堀敷金地ニ假潮爾ヲ設ケ以テ堀敷金地全面積二分ノ一餘ヲ所定ノ下底迄堀敷金セントス今ヤ該方法ニヨリ深キハ潮面以下三拾六尺淺キモ拾有四五尺迄堀敷金セシニ深サ拾五尺乃至二拾四尺ニ至リテハ僅土中一箇ノ石炭(厚少尺内外)アリテ其海岸部ニ屬スル部分其炭層ヨリ海潮ヲ滲透スルモ未ク多量ト認ムルニ至ラス斯ノ如ク本船渠地ハ硬土中石炭ノ有アリテ採堀上概ニテ容易ナルヲ以テ今ヨリ拾數年前迄ハ頻リニ採炭セシ者アリト云フ故ニ目下漸次堀敷金ニ後ト渠内各處ニ中拾尺高差尺内外炭坑

顯出セリ

八月上旬、頃ニ至リ船渠頭部ニ當リ深サ拾三尺ニ達シ海潮噴出セリ而シテ
 其量ハ千滿潮ノ時ニ至リ差違アルノミナラス其質之鹹水ナルヲ以テ必ズマ海潮ト
 連絡セルモノトシ之レカ侵入口ヲ探究シマアリシカ右噴出口ヲ數尺掘敷金ニ
 ルニ至リテ一ノ炭坑顯出シ坑内ヨリ出水セリ此時ニ當リテ前噴出量ヨリ遠カニ
 月量ニシテ朔望滿潮ノ時ハ一時間三十九噸以上ニ上リ而シテ該出水ノ干涸ノ時
 其量三分ノ一ニ迄減ズルモ全体ニ於テ漸次其量ヲ増ス勢アリシヲ以テ炭坑ノ海
 潮ヲ誘導スルノ案ヲ探中スルニ遂ニ船渠頭部ヲ距ル百三拾六尺ニ當リテ該溝渠
 内ナルヲ發見セリ其溝渠ハ即チ炭坑ノ上部ニ設ケラレ而シテ石垣底張石
 共目地塗ヲ施シアリト電氣漏洩水ヲ防グニ足ラズシテ朔望前後海潮溝渠本
 内ニ侵入シ自然坑内ニ漏洩セリ而シテ炭坑ハ本坑及枝坑數多アリテ各
 溝渠ノ下部ヲ通シ船渠地出水口ニ至リテ相會セルカガキニ依リ其漏量船
 渠地ニ至リ相合ヒテ多量トナルモノナリ

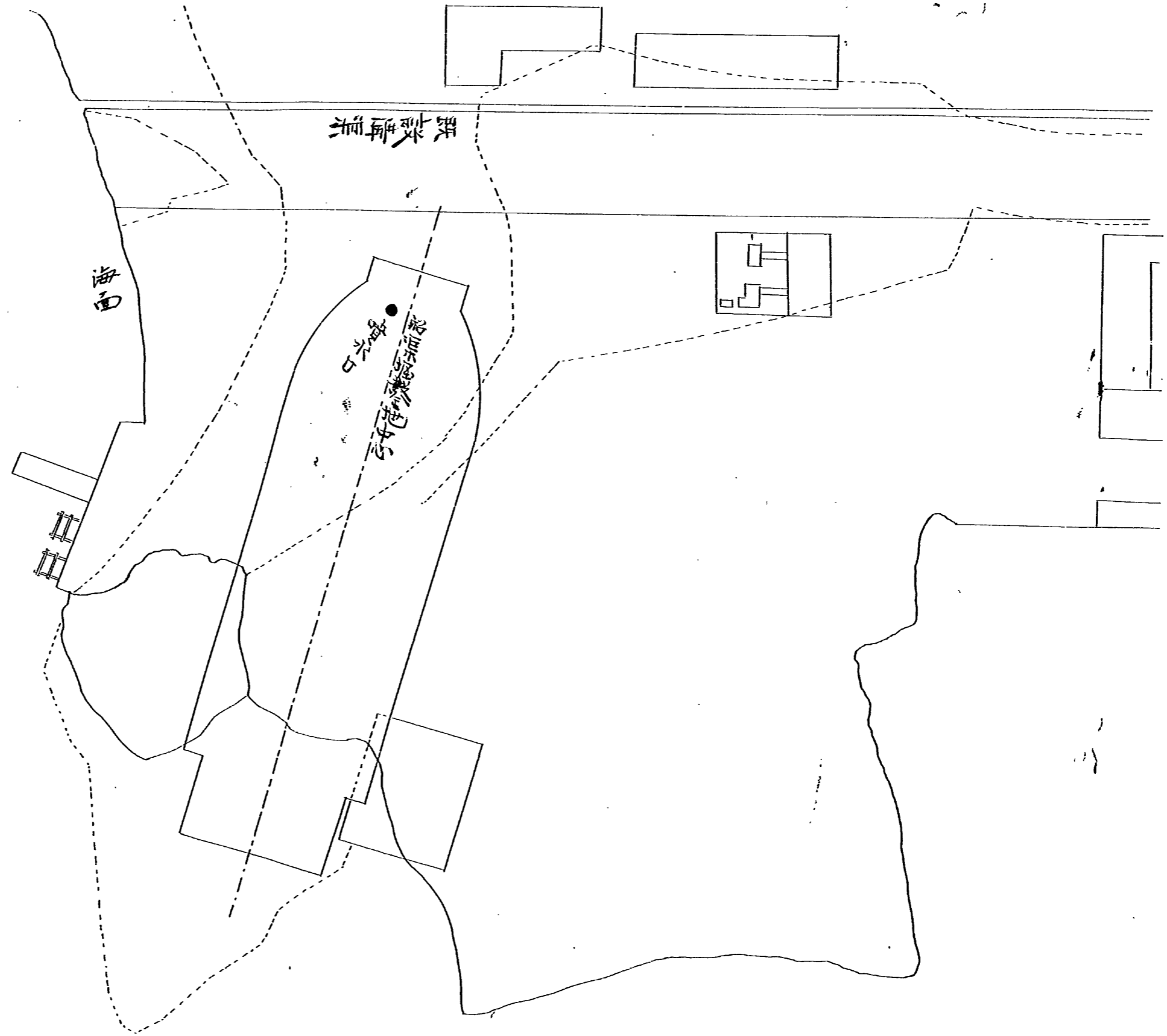
前陳、如ノ目下、取渠地内、出水スルハ、原因溝渠カ雨水及ヒ海潮ヲ炭坑内ニ誘
 導スルモノナルヨリ、取渠地内又ハ頸部ニ於テ炭坑内ニ水防用物料ヲ填塞スルハ
 之ヲ防御スルニ難キニアラザルヲ以テ目下此目的ヲ以テ眉々施工セリ此ノ以前記炭
 層ヨリ誘透スル海潮ハ堀敷全面積ノ増加スルニ從ヒ益々其量ヲ増スノ理ナルカ
 故ニ豫メ之ニ對スル見悟及益下底ニ達スル後ニ地質上ノ變ニ處スル臨
 機適應ノ講究ヲ要スルモ敢テ勸キニアラザル可シ

灰土木監督署石黒技師ノ意見見ル有之ニ付概況報告ス多也

明治三十二年九月十五日

某様様附
 海軍技師 川柳作

佐保鎮守府監督部長 岩村直喜 殿



(1/1200)

主事



淨寫

校合



發付

九月廿日



廿六年九月日

主務

立案者

大臣

次官



軍務局長



第三課長



經理局長



第三課長



訓令案

具府造船部 船渠々底築造方別紙圖面より

改正スレ

大正九年九月廿日 海軍大臣

佐世保政守村監務部長

官
四十九号

毎

頁

二四九号二

別紙通其有海軍部長訓令案以旨心
得之

大正九年九月廿日 海軍大臣

佐世保海軍司令部長

理由

中何船居回國通取正にキハ艦船入集ノ際支柱
実張及ヒ上キリヨ目ノ下便利ノ有難出京中ノ恒
別券圖面ノ批註有之
ヨ美ノ要更ヲ生セズ且之ヲ也
ヨ山ノ成ト多便利有之存多事案
星出作ノ裁也

官 二四九九 二

別紙一通其旨要略部長訓令より案出旨に
得べくし

大正九年九月廿日 海軍大臣

佐世修治言封司令多友

理由

中俣港尾回面と通取正にヨキハ艦船入集ノ際支柱
実張及ヒ止ヨリ方堅固ニシテ便利ノ自備ニ出系中ノ恒
川松師之協強ク悉ク要隘更ニ要更ヲ生セス且ニヨク
要更ノナキ湖ノ取止相成ル方便宜ナク存少ク要更
呈出印を裁可

海軍

主事



淨寫



校合



發付



十月六日



廿六年十月 日

主務

立案者

大臣



次官

軍務局長



第三課長



經理局長



第三課長



指令案

佐監一六九号 船渠築造工事変更ヲ要スル
件認許ス

明治二十六年十月六日

官房第五分科

五

母

頁

經理局

第三課

佐路一六九号

第三課

船渠築造工事変更ヲ要スル義上申

當鎮守府造船部 船渠築造工事潮溜部カニ當リ
下底岩盤非常ニ深ク前計画ヲ以テ施行成ニ難キ旨
該工事擔任技師恒川柳作ヨリ別紙ニ通申出タルニ依リ
篤ト詮議ヲ遂ケ夫處實際不得止義ト存夫且豫算
上ニ差響音モ無之夫条御認許相成度此段稟申矣也
明治二十六年九月十五日

佐世保鎮守府監督部長岩村兼善



海軍大臣伯爵西郷從道殿

追テ位置変更際提出セシ圖面ハ尺ミテ判明セサレ付茲ニ訂
正ノ分ヲ添付候也

船渠位置異形
官房並ニ同ニ

第三課

工事変更ヲ要スル義上申

船渠築造工事潮溜部多ニ當リ

ハク前計画ヲ以テ施行成ニ難キ旨

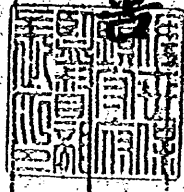
但川柳作ヨリ別紙ノ通申出タニ依リ

屢實際不得止義ト存矣且ツ豫算

奈御認許相成度此段稟申矣也

月十五日

府監督部長岩村兼善



西郷従道殿

出セシ番面ハ尺ニテ判明セサニ付茲ニ訂



1033

船渠位置移動ハ廿六年也月廿七日
省庁第四回ニテ
決定

1034

五ノ名ニ添テ其ノ

此圖 西國 爲 一 卷 見 之
所 在 西 國 中 一 卷 九 月 九 日



1033

1085

第一卷... 第二卷... 第三卷... 第四卷... 第五卷... 第六卷... 第七卷... 第八卷... 第九卷... 第十卷... 第十一卷... 第十二卷... 第十三卷... 第十四卷... 第十五卷... 第十六卷... 第十七卷... 第十八卷... 第十九卷... 第二十卷... 第二十一卷... 第二十二卷... 第二十三卷... 第二十四卷... 第二十五卷... 第二十六卷... 第二十七卷... 第二十八卷... 第二十九卷... 第三十卷... 第三十一卷... 第三十二卷... 第三十三卷... 第三十四卷... 第三十五卷... 第三十六卷... 第三十七卷... 第三十八卷... 第三十九卷... 第四十卷... 第四十一卷... 第四十二卷... 第四十三卷... 第四十四卷... 第四十五卷... 第四十六卷... 第四十七卷... 第四十八卷... 第四十九卷... 第五十卷... 第五十一卷... 第五十二卷... 第五十三卷... 第五十四卷... 第五十五卷... 第五十六卷... 第五十七卷... 第五十八卷... 第五十九卷... 第六十卷... 第六十一卷... 第六十二卷... 第六十三卷... 第六十四卷... 第六十五卷... 第六十六卷... 第六十七卷... 第六十八卷... 第六十九卷... 第七十卷... 第七十一卷... 第七十二卷... 第七十三卷... 第七十四卷... 第七十五卷... 第七十六卷... 第七十七卷... 第七十八卷... 第七十九卷... 第八十卷... 第八十一卷... 第八十二卷... 第八十三卷... 第八十四卷... 第八十五卷... 第八十六卷... 第八十七卷... 第八十八卷... 第八十九卷... 第九十卷... 第九十一卷... 第九十二卷... 第九十三卷... 第九十四卷... 第九十五卷... 第九十六卷... 第九十七卷... 第九十八卷... 第九十九卷... 第一百卷...

海軍公用文箱

佐世保鎮守府造船部船渠造設地潮留及堀鑿工事
費額増減調書ノ義旨意見ヲ添テ上申

一金拾貳萬五千六百四拾七圓九錢

豫竹美額

是ノ對入札ノ結果左ノ如シ

金拾萬貳千八百參拾參圓六拾四錢五厘

落札人 市村正太郎

金拾萬七千五百五拾八圓八錢五厘

入札人 橋本 清

金拾萬 千參百拾七圓九錢貳錢五厘

全 笠井慶次郎

金拾貳萬七千七百四拾圓九錢貳錢八厘

全 野口 榮馬

金拾貳萬八千九百四圓九錢五錢

全 佐藤 成教

金拾參萬五百六拾圓九錢五錢

全 小野 禎六

金拾參萬參千九百八拾圓五錢九錢五厘

全 木田 六郎

金指參萬八千九拾四拾六錢九厘

江口貞風

是二由之ヲ觀シハ市村正太郎ノ入札高ハ最低價ニシテ豫算金額ノ残額ヲ
 生スル實ハ金貳萬八千八百拾參圓參拾六錢九厘ナリ抑モ本工事ハ去年十月
 月請負契約締結後着々施行致シ来リ候處其位置東南ニ伏シテ硬土ノ良質
 ヲ顯ハシ之ガ土質ハ按ズルニ後日内部ニ施ス可キ遺積土ニ頗ル適宜ト確認シ高敷
 ヲ仰キ既定ノ位置ヲ少シク北西硬土ノ方域ニ変更セシニ當時請負金額即チ
 金指萬貳千八百參拾參圓六拾四錢九厘内金參千四拾六圓參拾五錢九厘
 一減殺ヲ呈スルニ至リ於是目下豫算ニ對シテ残額ヲ掲グルニ合計金額萬
 五千八百五拾九圓七拾貳錢ナリトス然ルニ本工事ハ船渠築造ノ部分ナルヲ以テ
 右残額ノ如キモ總豫算額ニ對シテ全ク不要額ト看做スル能ハカルナリ何
 トナレハ船渠築造工事ノ如キハ多量ノ水中事業中ノ最モ至難ノモノニシテ
 地質上ノ結果及ビ不測ノ災禍等アリテ時ニ臨機適應ノ方法ヲ講究施行セ
 かり可カラザル場合尠カラザルヲ以テ其残額ノ如キ豫シメ之ガ費造ニ備ヘ置カ

かハ可カラカハヲ以テナリ然ルレ今マ潮雨ノ一部分ニ當リ下底岩盤非常ニ深リ
 真高低甚シク前計畫ト異ニシ其最深最大満潮面以下四拾九尺八寸五分其
 長百五拾參尺ニ及ブリ則チ目下之ニ對スル適應ノ方法ヲ講究スルノ必要ニ
 遭遇シ前記殘額ノ幾分ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得カハニ至シテ即チ
 真豫算額ハ左ノ如シ

金壹萬七千參百拾五圓四拾九錢四厘 潮番一部模樣替ノ可増スベキ高
 金八千八百八拾貳圓八拾貳錢八厘 全 上 二 月 減スベキ高

差引

金九千五百五拾貳圓六拾六錢六厘 今回増高

即チ今回更正計畫ト在未計畫トヲ比較スルハ差引前記ノ増加ヲ生スルモ、
 ニシテ前記殘額内ヨリテ補充スベキモノトス仍テ殘額左ノ如シ

金貳萬五千八百五拾九圓七拾貳錢 前記殘額

内

金九千五百五拾貳圓六拾六錢六厘

今圓補充スベキ増高

差引

金壹萬六千七百七圓五錢四厘

残高

右之通り有之候ニ付別紙番面相添此段上申候也

明治二十六年九月十三日

造幣科附

海軍技師 恒川柳作



監督部長岩村兼善殿

逐々位置変更ノ際提出セシ番面ハ是レト判明ナズバ殊

内務技師石屋五三ノ意見有之メテ茲ハ訂正ノ旨

而添置候

第六〇六號

軍務局長

第三課長

經理局長

第三課長 相原

佐世保鎮守府造船部、船渠築造工了り、要請す、要
るに、別案一由、同府造船部部長より上申
あり、此の由、又の書見、並に、此の由、又の書見、
あり、此の由、又の書見、並に、此の由、又の書見、
あり、此の由、又の書見、並に、此の由、又の書見、

廿六年九月二十日

軍務局長

右里の内務局持作記

此下別案の由、又の書見、並に、此の由、又の書見、

本月廿二日附軍第廿七〇七号ヲ以テ山名村
 代々保鑑守存並世部部長ヨリノ書
 申書(本月十五日附代々監一六九号)及ヒ
 恒川恒師ヨリノ書(本月十五日附)ハ
 係ハ佐世保鑑守存送込部附船渠
 工事ト変更ノ條ニ付テ照會シ極
 手ハ先般恒川恒師出立アリ
 際海軍少将ニ於テ該計届ケ付 筆下
 協派ヲソ遂ケ其末今回別白申出
 事ハ其手事ハ其計届大體ニ突シテ別
 名見立及且ソ強世々上ニモ申御事キ
 林城ノ七號ハ許可申出下存及 去

第一區上大倉 芥原

恒川打師ヨリノ書見事所存ナル様
 探替圖面(側面及断面図共)中ニハ注工等
 ニ要スル柱ハ悉ク木柱ノ採ト見入(鑄鉄
 制衣ノ柱ヲモ借用スルノ見込ナルヤ其邊判
 然セス其外ハ注工等ト云テ高木一層
 洋細ナル油垂ヲ要シ其儀ニ其ノ支
 目滿見書像其内注工書及ヒ仕探明
 個圖等々之ヲ付其儀ハ注工等
 在事ト見開陳書其及ヒ其圖等々
 也

明治廿六年九月廿六日

石里ノ幸曼世ノ書打師



伊藤海軍省軍務局長殿

島崎副官の通友に因りて
此返書致す

第一編上木監督署

第七〇二號ノ三

軍務局長



第三號



電信案

佐監一六九号付属圖ニ依レハ潮海工事ノ柱ハ
 総テ木製ノ如シ鑄製ノ柱ニ切用トザル義ナレバ
 直ニ回答アリタシ
 廿六年九月廿九日 軍務局

佐鎮邊留部宛

1045



局着			局發			受信人
日	時	分	日	時	分	
		受信 午後 五分	受信 午後 七分	第一 一〇 日	廿七 局	川口 カイコウ カシノ キノコ コノ カシノ コノ
日本政府電報送達線 着第 六六六 號						川口 カシノ カシノ
潮涌ノ鐵柱百本ヲ攪拌替ノ所ニ 用ユル見込 佐世傳監督部						

1046

福澤
着

佐世保迄如部船渠潮留工又、伊光鉄柱、或右同村
 船留部へ電信ヲ以テ同左ノ電ヲ通答スル
 伊光存スル或否ヲ立見シテ通答スル也
 明治廿六年十月三日

伊光 謹長
 石里 政 師 部

佐世保船留部より回電

潮留ノ鐵柱百本ヲ摸樣考メ所用ニ見ユ



今テニハ附ヨ以テ代々保造部船渠潮留工事係
 ル鉄柱ノ不支付之ハ申指ノ越了後右ノ岸地
 部ヨリノ返電ニテハ里表ノ恒川技師出立ノ際海
 軍者ニ於テ協議致如ク有之様ニ考テ五ノ案
 右ノ壽シテハ別ニ意存ニテ之也其如クハ
 明治廿六年十月二日

土木部技師石黒九千二

海軍者

代々又軍務ノ方三課長殿

海軍省 水監督殿

軍務局長

佐第二五七七號

第三課

三月八日

供覽 次官

1049

船渠戸船ノ義ニ付御届

中府船渠戸船ハ最初船渠外部戸当ノ総深サ

ヲ指針ソートルトシテ製圖ノ上製造ノ契約ヲ十三

タルニ其後五百ミリ誤戸當ノ深サ増加美ニ付水面

以上ノ高サ相減シ甲板上面ヨリ也平追凡ソ四百ミ

リノ段ヲ生スヘク美奈知念此段御届仕美也

明治二十六年十一月廿七日

佐世保鎮守府司令長官相浦紀道

海軍大臣伯爵西郷從道

經理局長

第三課長 相原

追テ本文之通り水面上ノ高サ相減シ美得共

中港内ハ波濤モ無之ニ付渠内ニ波ノ打込様
 ナル所レ無之且強弱ニ於テモ一様ニ爲ル也
 無之美亦内部戸當リニ在ラハ船甲板上面ハ
 ント地平ト平均致美矣 此段申添美也

決裁濟大臣

次官



廿六年十月日

主務

主事



淨寫

校合



發付

十月廿一日



立案者

軍務局長



第三課長



經理局長



第三課長



指令案

吳監連第八〇号白造船部第二船渠公築造設計

変更ノ件認許ス

明治二十六年十月廿一日

官房第二七八号

海軍

渠築第八。附函

造船部第三船渠築造設計振變更方之義付上申

當府造船部繼續事業中吳鎮守府建築費第二船渠築造之義ハ来ル明治二十七年より起工今二十九年度迄ニ完成ノ豫定ニ有之候處抑最初第二船渠築造ノ設計ニ當リ戸舷ヲ貳箇所ニ移シ得ルノ裝置ニ為シタルハ入渠艦舷ノ大小ニ應シ彼是適用セシムル見込ニシテ其主眼タル小艦舷ヲ容ルニ際シ戸舷ヲ渠内ノ位置ニ移シ遮塞セハ排水ノ量ヲ減シ隨テ揚水時間ヲ減スベキ豫想ナリシモ揚水唧筒ニ餘カアルヲ以テ支柱ヲ配置スル時間ニハ充分揚水ニ得ルニ付是迄經驗上曾テ此ニ様ノ裝置ヲ活用セシメテ且ツ中間戸當リノ為ノ渠内兩側ノ通路ヲ切斷セラレ横支柱ヲ置クニ大ニ不便ナリ要スルニ最初ノ計畫ハ實驗上不便不敷候條即チ別紙仕様書圖



ヨシタ

別紙圖面

小造設計振變更方之義ニ付上申

系中吳鎮守府建築費第二船渠築

年度ヨリ起工今二十九年度迄ニ完成ノ

初第二船渠築造ノ設計ニ當リ戸船ヲ

置ニ為シタルハ入渠艦船ノ大小ニ應シ

ニシテ其主眼タル小艦船ヲ容ルニ際シ

シ遮塞セハ排水ノ量ヲ減シ隨テ揚水

リシモ揚水唧筒ニ餘カアルヲ以テ支柱

分揚水ニ得ルニ付是迄經驗上曾テ此

一ナク且ツ中間戸當リノ為ノ渠内両側

支柱ヲ置クニ大ニ不便ナリ要スルニ

一不便不敷候条即チ別紙仕様書圖



シテ

別紙圖面ニ抄

船渠圖
船渠位置圖
船渠断面圖
船渠平面圖

1053

面之通改正ヲ加ヘ施工致度モモ費額之義ハ既定豫算額
内ヲ以テ處辦可致候条御認許相成度此段上申候
也

追テ本文御裁可ノ上ハ曩ニ呈出仕置候年度割工費仕
譯書ニ循ヒ工事施行可致候也

明治二十六年十月十六日

吳鎮守府監督部長佐久間義一郎



海軍大臣伯爵西郷從道殿

吳鎮守府造船部第二號船渠新設仕積書

一 船 渠

壹ヶ所

附

一 渠口海水遶門鐵製水船

壹艘

一 抽水用青銅製水防弁

貳個

一 船渠周圍緊固用鑄鐵柱

貳拾五本

一 船渠周圍緊固用ケブスシ

四個

一 船渠手摺用鑄鐵柱

六拾五本

一 全用鐵鎖

三百三拾本

一 渠内盤木

百七組

一 渠口左右袖石垣

八拾米突

一 柳筒所

壹ヶ所

右仕様別紙番面之通り位置第壹配渠中真ノ趾ル東北ノ
 方七拾六米突三百五拾ミル米突トス本渠ハ渠内端ミル第
 一ノ壹リ迄百三拾五米突五百ミル米突渠内端ミル第二ノ
 壹迄而四拾壹米突トスリ數ヶ所所渠底傾度貳而分壹
 渠内柳木溝中真トス溝長延而貳拾貳米突而ミル米突中
 六百ミル米突底勾配長壹米突ト付卷ミル米突渠口第
 一ノ壹リヲ第二ノ壹リ迄間五米突五而ミル米突渠口中
 上部ミテ貳拾八米突三而八拾ミル米突下部貳拾四米突渠
 内最大中卷拾八米突四而ミル米突平地ミル深拾六米突
 而ミル米突トス渠口底半圓ミレテ側左右法直之壹米突付

而之拾こり米突ト渠内底勾配長竜米突と付五より米突ト左
右側直立竜米突と付五拾こり米突トス

一肥渠堰鑿出砂、総と練兵場内と運送地平均埋立可致事

一総と築造用石材、花崗石白色硬質上等品とし山口縣

一周防国徳山及愛媛縣之伊豫國其曾玉村産石材より

渠内側平均石、使用致渠底掘木溝袖石垣と使用スル石

材、廣島縣之倉橋場及宇和木産上等質、石材より使用スル石

材彫刻、総と築石、見附面鑿中切と仕上合端大敷切並並

翁と之欄合セ不陸敷之仕上下木縁側根石圓形階段等、

竜個ノ石材より造り出又、切欠、要スルモノトス、乾之石材

寸法記載使用場番號ヲ銘々朱より記號可致事

一築造用石使用ヶ所ノ寸法ヲ示ス渠内底下木用石

溝深勾配、倣ヒ切欠、仕付左右ヲ組合竜車置長三百と米突

方石材組合底平敷用石 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 及 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

組合致底内盤木止用石 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 左右植込送り真多真造

堍朱突戴面より朱突底内腕接穴長五米突中堍朱突深戴朱

突五面より朱突築石 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 組合可致事

一側取段目より平敷用石材 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

長八百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 頭部半圓の分所 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 階段八分所 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

堍本ノ石材より堍段より切出し堍分所取本ノ組合可致事

一側三段目より平敷用石材 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

頭部半圓の分所 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

階段拾分所 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル 堍本ノ石材より堍段より切出し

堍分所取本ノ組合可致事

一側四段目より平敷用石材 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

頭部半圓の分所 長九百三十九センチメートル
幅四百三十九センチメートル
厚七センチメートル

階段拾ヶ所 長きソートル二角よりソートル 志本ノ石材より之を切出し之を所
真木苑組合可致事

一側五段目ニ至テ五重子置石々材 長きソートル 以テ長手北ニ
組合上端平均シ石 長きソートル二角よりソートル 頭部半圓之ヶ所ニ

石材組合階段左右ニ拾ヶ所此段数而拾六段壹個ノ石
材 長きソートル二角よりソートル 石より以テ四段ニ切出し之を
石材より以テ三段ニ切出し組合可致事

一側六段目ニ至テ四重子置石々材 長きソートル 以テ長手北ニ組合
上端平均石 長きソートル二角よりソートル 面ニ据付半圓ノヶ所ニ

組合階段左右八ヶ所段数而段壹個ノ石材 長きソートル二角よりソートル
石より以テ四段ニ切出し 長きソートル二角よりソートル 石材より以テ三段ニ切出

し組合セ可致事

一側七段目ニ至テ四重子置石々材 長きソートル 以テ長手北ニ組

合上端平均石長きソトニ百ナリトシ 小面出シ握付頭部半四ナリ
 所中長きソトニ百ナリトシ 組合階段八ヶ所段数而故 巻個石長き米突
中長きソトニ百ナリトシ 石材ソ以テ 四段ニ切出シ長き米突
アハ百ナリトシ 材ヲ以テ三段ニ切出シ組合せ可致事
 一側八段目ニ至テ四重ニ石ヲ材長きソトニ百ナリトシ 組合根石長きソトニ百ナリトシ
 上端平均石長きソトニ百ナリトシ 五面ニ石ヲ材長きソトニ百ナリトシ 之石材ヲ組合階段拾
 ヶ所段数九拾段巻個ノ石材長き米突 三段ニ切出シ組合
 可致事
 一側九段目ニ至テ三重ニ疊石々材長き米突 長手石ニ組合せ上
 端平均石長きソトニ百ナリトシ 小面出シ地平ニ 握付ヶ所階段拾ヶ所
 段数六拾段巻個ノ石材長きソトニ百ナリトシ 石ヲ以テ三段ニ切
 出シ組合可致事
 一頭部大法リ之ヶ所石材長きソトニ百ナリトシ 上平均石長きソトニ百ナリトシ
五面ニ米突

組合階段五拾四段 堯本之石材 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 石之少之或段

功出し 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 石材ノ以テ三段ニ切出し申段

一 渠口之方考り底用石材 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 及之考り石 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

切欠ノ半田形ニ組合左右側及内部由側築石 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

組合可致事 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

一 階渠横ノ水溝長延ニ拾八米突高七米突三石拾ニ米突横幅 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

九下ノ米突築立用石底石 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 側石北 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 長七尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

一 渠口左右袖石垣長延四拾米突内高拾三米突三百ニ米突 長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

築石 長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 長手北ニ組合渠口外左右横面ニ至リテ

長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石 長九尺五寸五分 幅四尺二寸五分 重六石

使用石長九百より米突ノ石材より長手北ノ組合彫刻ノ面云
 翁コソキ端合切合階段或給ハ段屯個石材長七百よりソートル角
 三般ノ切出し致し船渠左右石垣ノ前面長延六拾米突石
 垣ノ面杭打並致し干潮面より切撤杭木長五米突四百より米突迄
 屯ソートル付真通り五本ノ打方可致事
 一即箇所在末第一船渠口及排水場長拾米突中真米突五百より
 米突ノ深三米突改築堰下ニ付地中ノ深拾六米突在末築
 之石建外部より堰下ノ横杭ニ該即箇所底ノ堰崩ノ上部各
 請置キ又より下端ノ工事施ヨスルモトス右ノ使用スル石
 材長九百よりソートルノ石側長手北ノ組合底中敷上同新石材ノ
 以テ築立ス即箇鑄鐵管在末ノ倣ヒ新ニ継増シ要スハキ事
 一渠底基礎ハ凡全長三分屯中二拾屯米突五百より米突ノ
 部分ノ監叔目官ノ指揮ノ隨ヒ杭年五尺元口三百より

米突末口戴而密埋米突、杭木先尖し九百密埋米突、明間
 三打坊、杭頭多平、切坊、杭頭上、生杭角四百密埋
 十露般、水急、之渡、其上部、全ホリ合、之致、捨材
 三天、明キ、開、之懸、之渡、之練、手、違、大釘、以、之止、之方、致、左
 木部、総、之、焼、方、上、使用、可、致、事、

一、配、渠、墨、築、之、総、之、モ、ル、タ、ル、リ、使用、シ、石、合、端、於、之、米、突、
 明、キ、ト、是、之、モ、ル、タ、ル、混、和、方、法、左、ニ、示、ス

セメント 壺、 砂、 戴、 墨、石、合、端、と、諸、ル、セ、メント、壺、

砂、 壺、

渠底基礎及側石垣裏、平栗を築き、之、田、及、碎、礫、マ、シ、ク、リ、ト
 二、使用、ス、ル、分、ハ、水、礫、セ、メント、或、ハ、火、山、灰、内、指、定、ノ、收、ル、バ、シ

側石積、之、裏、及、平、栗、石、
長、栗、ノ、米、突、ノ、上、部、ノ、米、突、也、
 中、栗、ノ、米、突、ノ、中、部、ノ、米、突、也、
 下、栗、ノ、米、突、ノ、下、部、ノ、米、突、也、
 平、飛、壺、個、毎、
 之、モ、ル、タ、ル、リ、入、泥、工、職、之、築、之、底、用、レ、ク、リ、ト、混、和、シ、生、石、灰、

現場より木練り致し死タルノ配合ハ水硬セメント灰
 石灰セメントモ、こしケクレクリト配合ハ碎礫四モルタ
 ル六ノ割合ヨリ築堅ソ給モルタルハ機械練トスル
 砂ハ廣嶋市太田川産モ、こしケ洗滌上使用致渠中
 水ノ湧出スルケ所アルハ紙絛セメントノ使用スヘシ統
 一海岸袖石垣築造方モ船渠築造ト同様タルヘシ
 一使用セメントハアルセシ會社製或ハ他ノ舶來品トシケアルセシ
 會社製製造品ト具耐カ同等ナルモノニ限ラセントハ検
 査ト受テ統管官ニ納メ使用時々下ケ受テ使用スベシ
 但シ石灰ハ生石灰タルハ現場ニ貯置キ濕氣ヲ帯ビ
 ザル様注意スベキ事
 一渠口海水遶門ノ船壳材料ハ鋼鐵板ヨリ新造總体
 ノ形及附屬ノ等ハ第一船渠ニ備付アル形ニ隨フベキ事

一渠内盤木総數百七組とし渠底掘付の真多真送送り

巻ノ一ト二百より米突トシ各個渠底巾長七米突ノ組

之丈多送り巻休出底盤木止石内ニ入ル盤木長

二米突四百より米突前ノ上ニ組立高巻米突二百より米突ト

一柳前所内柳木止ノ用青銅製ノ水防ノ第一巻能渠ノ柳木

口ノ方巻個は付新設第二能渠ノ方ニ向ヒ巻個は付石

付方ニ全制衣ノボートヲ使用シテ石礮を坑ノ掘明ニ能及

ソニテ油ヲ使用可致事

一能渠周圍地上ニ網取整治用鑄鐵柱其槍立巾長或米

突根至四百より米突地上至三百より米突三槍より米突大

地巾巻米突八百より米突角ニコレヲリトシ以テ埋築根本長

九百より米突五百より米突角石を本ノ掘根根堀込致地巾

ニ平均石長九百より米突四百ノ掘付可致事

一 船渠周圍鑄鐵製ケマスヲシ四個渠ニ及頭部左右各一
 個並基礎を米突八百ミル米突角ニシテクリートヲ築キ根
 石長九百ミル米突五百ミル米突角石材ヲ組合ボート
 大ノ明ケ鉦留ニシ致シ

一 船渠周圍手摺用鑄鐵柱長壹米突五百ミル米突四
 至其百ミル米突ニ拾五本建設地中壹米突角ニシテ
 リートヲ以テ築堅ノ根石長五百ミル米突
四百ミル米突角ノ石材上端仕上楯
 付可致事

一 鐵鎖全拾ミル米突長延三百ミル拾米突前手摺用鑄鉄柱
 二張方可致事

一 渠口海底立七千拾拾五合九分深渠底ニ隨ヒ浚溝致
 但浚溝ケ所ハ止取設ケ跡及止内ハ渠内堰敷部
 分ニ入アルモトス右ハ砂船積運送方ニ準儀外指定

場所と取捨可致事

一 雜工事 船渠周圍長延、雨水吐棄、研下水、雜石、以下水
 上中九、而より米突、深而より米突、始米突、間毎々中、或米突、
 石を橋、掛ケ、右石材、厚而より米突、使用仕上、上端、鑿中
 切合、端切合、掘付可致事

一 渠口築造、為ノ漸、止シテ、後々其築造法、方、清負人、ニ於テ
 先カ、水力、耐ル、計匠、番、面、仕、構、作リ、監督、官、吏、ニ、差、出、シ
 得、認、シ、度、ケ、テ、着、手、施、ラ、致、渠、内、総、テ、工、事、終、リ、至、リ
 指、揮、ニ、從、ヒ、該、漸、止、シ、取、毀、テ、跡、海、底、迄、浚、深、可、致、事

一 柳、前、所、家、屋、建、坪、七、拾、八、坪、地、形、根、切、中、深、五、尺、練、砂、利、打
 堅、シ、土、中、煤、化、石、六、段、積、則、石、礎、山、産、石、材、シ、以、テ、壹、段
 切、掘、小、屋、果、合、壹、手、其、他、松、挽、立、材、シ、以、テ、切、組、シ、小、屋、組、要
 所、鐵、物、之、用、ニ、建、堅、シ、屋、根、密、木、松、裏、板、六、分、板、張、立、屋、根

左ノ外都ヲ請負人ニ於テ先立ルベキ事

- 一 蒸気ホシフ
 - 一 モルター
 - 一 瓦
 - 一 瓦式
- 一 土居葺瓦葺漆喰喰塗等若致入口窓枠其他建具類
 中仕切羽目若檜木杉上葺等用ヒ附屬金物等用ヒ指立煉
 化壁巻收半積外洗出し内廻り白漆喰仕上ニシテ入
 窓建具其他白心ニ塗テ仕上軒棟葺瓦葺堅棟共トシテ鉄板と致
 一 角屋地所根切風石据付ケル屋組建具類屋根下地並
 一 土居葺瓦葺漆喰喰其他若木家口割可致事
 一 請負ノ事ノ為シモルター製造ノ屋及人史ノ土居等ハ
 総テ屋根瓦并鐵葉葺ノ外許可セザルモノトス
 一 右ノ事施行方法ハ監督官吏ノ指揮ニ隨ケル事
 一 本ノ事施行ノ旨官より貸出スル委員機械ニ在リ通
 一 モルター
 一 瓦
 一 瓦式